

タイトル

巻数

作者

サンプルサークル

毒もみのすきな署長さん宮沢賢治 四つのつめたい谷川が、カラコン山の氷河から出て、ごうごう白い泡をはいて、プハラの国にはいるのでした。四つの川はプハラの町で集って一つの大きなしずかな川になりました。その川はふだんは水もすきとおり、淵には雲や樹の影もうつるのでしたが、一ぺん洪水になると、幅十町もある楊の生えた広い河原が、恐ろしく咆える水で、いっぱいになつてしまつたのです。けれども水が退きますと、もとのきれいな、白い河原があらわれました。その河原のところどころには、蘆やがまなどの岸に生えた、ほそ長い沼のようなものがありました。それは昔の川の流れたあとで、洪水のたびにいくら形も変るのですが、すっかり無くなるということもありませんでし

た。その中には魚がたくさんおりました。殊にどじょうとなまずがたくさんおりました。けれどもプハラのひとつたちは、どじょうやなまずは、みんなばかにして食べませんでしたから、それはいいよ増えました。なまずのつぎに多いのはやっぱり鯉と鮒でした。それからはやもおりました。ある年などは、そこに恐ろしい大きなちようざめが、海から遁げて入って来たという、評判などもありました。けれども大人や賢い子供らは、みんな本当にないで、笑っていました。第一それを云いだしたのは、剃刀を二挺しかもっていない、下手な床屋のリチキで、すこしもあてにならないのでした。けれどもあんまり小さい子供らは、毎日ちようざめを見ようとして、そこへ出かけて行きました。いくらまじめ

に眺めていても、そんな巨きなちようざめは、泳ぎも浮びもしま
せんでしたから、しまいには、リチキは大へん軽べつされました。

さてこの国の第一条の「火薬を使つて鳥をとつてはなりません、
毒もみをして魚をとつてはなりません。」というその毒もみ

というのは、何かと云いますと床屋のリチキはこう云う風に教え
ます。山椒の皮を春の午の日の暗夜に剥いて土用を二回かけて
乾かしうすでよくつく、その目方一貫匁を天氣のいい日にもみじ
の木を焼いてこしらえた木灰七百匁とまぜる、それを袋に入れて
水の中へ手でもみ出すことです。そうすると、魚はみんな毒を
のんで、口をあぶあぶやりながら、白い腹を上にして浮びあがる
のです。そんなふうにして、水の中で死ぬことは、この国の語で

はエップカップと云いました。これはずいぶんいい語です。と
にかくこの毒もみをするものを押えるということは警察のいちば
ん大事な仕事でした。ある夏、この町の警察へ、新らしい署長
さんが来ました。この人は、どこか河瀬に似ていました。赤ひ
げがぴんとはねて、齒はみんな銀の入齒でした。署長さんは立派
な金モールのついた、長い赤いマントを着て、毎日ていねいに町
をみまわりました。驢馬が頭を下げてると荷物があんまり重過
ぎないかと驢馬追いにたずねましたし家の中で赤ん坊があんまり
泣いていると疱瘡の呪いを早くしないといけないとお母さんに教
えました。ところがそのころどうも規則の第一条を用いないも
のができてきました。あの河原のあちこちの大きな水たまりから

いつこう魚が釣れなくなつて時々は死んで腐つたものも浮いていました。また春の午の日の夜の間に町の中にたくさんある山椒の木がたびたびつるりと皮を剥かれておりました。けれども署長さんも巡査もそんなことがあるかなあというふうでした。　ところ

がある朝手習の先生のうちの前の草原で二人の子供がみんなに囲まれて交る交る話していました。「署長さんにうんと叱られたぞ」

「署長さんに叱られたかい。」少し大きなこどもがききました。

「叱られたよ。署長さんの居るのを知らないで石をなげたんだよ。するとあの沼の岸に署長さんが誰か三四人とかくれて毒もみをすするものを押えようとしていたんだ。」「なんと云つて叱られた。」

「誰だ。石を投げるものは。おれたちは第一条の犯人を押えよう

と思つて一日ここに居るんだぞ。早く黙つて帰れ。つて云つた。」

「じやきつと間もなくつかまるねえ。」　ところがそれから半年ばかりたちますとまたこともらが大きすぎです。「そいつはもうたしかなんだよ。僕の証拠というのはね、ゆうべお月さまの出るところ、署長さんが黒い衣だけ着て、頭巾をかぶつてね、変な人と話してたんだよ。ね、そら、あの鉄砲打ちの小さな変な人ね、そしてね、『おい、こんどはもう少しよく、粉にして来なくちやいかんぞ。』なんて云つてるだろう。それから鉄砲打ちが何か云つたら、『なんだ、柏の木の皮もまぜておいた癖に、一俵二両だなんて、あんまり無法なことを云うな。』なんて云つてるだろう。きつと山椒の皮の粉のことだよ。」　すると一人が叫びました。

「あつ、そうだ。あのね、署長さんがね、僕のうちから、灰を二俵買ったよ。僕、持って行つたんだ。ね、そら、山椒の粉へませるのだろう。」
 「そうだ。そうだ。きつとそうだ。」
 みんなは手を叩いたり、こぶしを握つたりしました。
 床屋のリチキは、商売がはやらないで、ひまなもんですから、あとでこの話をきいて、すぐ勘定しました。

毒もみ収支計算 費用の部 一、

金 二両 山椒皮 一俵 一、金 三十銭 灰 一俵

計 二両三十銭也 収入の部 一、金 十三両 鰻

十三斤 一、金 十両 その他見積り 計

二十三両也 差引勘定 二十両七十銭 署長利益 あんま

りこんな話がさかんになって、とうとう小さな子供らまでが、巡

査を見ると、わざと遠くへ遁げて行つて、「毒もみ巡査、なま
ずはよこせ。」なんて、力いっぱいからだまで曲げて叫んだり
するもんですから、これではとてもいかんというので、プハラの
町長さんも仕方なく、家来を六人連れて警察に行つて、署長さん
に会いました。二人が一緒に応接室の椅子にこしかけたとき、
署長さんの黄金いろの眼は、どこかずうつと遠くの方を見ていま
した。「署長さん、ご存じでしょうか、近頃、林野取締法の第一
条をやぶるものが大變あるそうですが、どうしたのでしょうか。」
「はあ、そんなことがありますかな。」「どうもあるそうですよ。
わたしの家の山椒の皮もはがれましたし、それに魚が、たびたび
死んでうかびあがるというではありませんか。」「すると署長さ

んがなんだか変にわらいました。けれどもそれも気のせいかしらと、町長さんは思いました。「はあ、そんな評判がありますかな。」「ありますとも。どうもそしてその、子供らが、あなたのをわざだと云いますが、困ったもんですな。」署長さんは椅子から飛びあがりました。「そいつは大へんだ。僕の名誉にも関係します。早速犯人をつかまえます。」「何かおてがかりがありますか。」「さあ、そうそう、ありますとも。ちゃんと証拠があがっています。」「もうおわかりですか。」「よくわかつてます。実は毒もみは私ですがね。」署長さんは町長さんの前へ顔をつき出してこの顔を見ろというようにしました。町長さんも愕きましました。「あなた？ やっぱりそうでしたか。」「そうです。」

「そんならもうたしかですね。」「たしかですとも。」署長さんは落ち着いて、卓子の上の鐘を一つカーンと叩いて、赤ひげのもじやもじや生えた、第一等の探偵を呼びました。さて署長さんは縛られて、裁判にかかり死刑ということにきまりました。

いよいよ巨きな曲った刀で、首を落されるとき、署長さんは笑って云いました。「ああ、面白かった。おれはもう、毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな。」みんなはすっかり感服しました。底本：宮沢賢治

「ちくま日本文学全集」(筑摩書房) 1991(平成3)年3月

20日第1刷発行親本：宮沢賢治全集(ちくま文庫) 入力：古村充

校正：野口英司 1998年10月17日公開 1999年7月23日修正 青空文庫

作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

タイトル

巻数

2020年 7月13日 初版

奥付

発行	サンプルサークル
著者	作者
URL	http://writer.sample.org/
E-Mail	writer@sample.org
作成	青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL	http://aozora.xisang.top/
BiliBili	https://space.bilibili.com/10060483

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>